



「魔王討伐軍隊長、ロイ。本日付でお前に特別任務を与える」

しんと静まり返る部屋の中、王の声がはっきりと響いた。特別任務。魔王討伐軍隊長として軍を率いて一年あまり、まさか俺がそんなものを任されるとは思ってもいなかった。

「はっ、なんなりとお申し付けください」

自然と背筋がピンと伸びる。どんな任務なのかと緊張して待っていると、王は驚くべき言葉を口にした。

「お前に勇者への魔力供給を頼みたい」

「魔力供給ですか……？」

聞き慣れない単語で俺はつい聞き返してしまう。

しかし王はそれを気に求めることなく更に続けた。

「ああ、我が国の勇者様は魔力がずっと使えなくて困っていたが、どうやらその解決策が見つかったようだな……全く手間のかかるやつだ」

確かに我々の国の勇者は魔法が使えない。しかし、それを上回るほどの武芸の腕がある。それで十分だと思っていたが……今の言葉から察するにどうやら王は満足はしていなかったらしい。

「なるほど、確かに魔法も使えるに越したことはありませんが、どのような方法なのでしょう……？」

いままで人の魔力を増幅させる魔法はあったが、全くゼロの人間に分け与えるという方法はなかつ

たはずだ。

「どうやら、勇者限定の方法らしいが……魔力の高いものと性行為を行うことで魔力を分け与えることができるようだ」

「せ、性行為……？」

「ああ、古い古文書にそう記されていた。我々も半信半疑だが試して見る価値はあるだろう」

最近王が国中の学者を集めて、古文書を片っ端から読ませていたことは知っていた。何を調べているのだろうと思っていたが、まさかそんなことだったとは。

「それはどんなことを……」

「ははっ……ロイ、お前だって何も知らぬ子供ではないだろう。それに、お前にとってこれは悪い話で

はないはずだが……？」

王は真っ直ぐ俺を見据えながらすべてを知っているかのような顔でそう問いかける。その様子から、俺の気持ちを知ってこのような提案をしていることは明白だった。

「しかし……それは勇者は納得するでしょうか？」

「そんなものはしてもらうに決まっているだろう。」

この国のためだ仕方あるまい」

たしかに戦争は終盤になり、戦況はこちらがやや押され気味なことは薄々感じていた。

「お前がこの国一番の魔法使いだから選ばれたんだ。それに勇者に少なからず気持ちを寄せていることも。ただ……お前ができないというのなら、他の男に頼むしかないだろうな」

「……そんなことはできません。でしたら俺が」

利用されていることはわかっていた。しかし、頭で考えるよりも早く口が動いてしまう。

「そうか……お前が引き受けてくれて助かった。頼んだぞ」

そう言うときさっさと用事は終わったと言わんばかりに王は家来に目配せをし、俺を部屋から追い出した。

◇ ◇ ◇ ◇

「なんだこの服……」

自室に帰ると俺が受け入れることをわかっていたかのように服と手袋が置かれていた。着替えて見ると、鏡の中に映るのは着飾った自分。

「はぁ……魔力供給係として性行為か……」

あいつとこんな形で体を重ねるなんて、手の中のロザリオを見つめながら初めてであったときのことを思い出す。

◇ ◇ ◇ ◇

あの日はとても暑かった。俺たちの住む村に新しく勇者となった女の子がやって来ることになったとある夏の日。

朝から村は祭りかと思うほどの忙しきで、大人も子供も準備に村中を駆け回っており、俺はその様子を窓からただ眺めていた。

「勇者様を怖がらせてはいけない」

「村に化け物が居るなんて知られたら」

誰が言ったかわからない心配は次第に大きな声となり、俺のことを小さな倉庫に閉じ込めた。

この村での俺の扱いは散々だったし、お祝いの席にはなから参加できるとは考えていなかったが、できることなら、俺よりも幼いという勇者のことはひと目くらい見られたらとは思っていた。

ただ……そう思っていたのに。

「勇者様……そっちに言っっては……！」

そう遠くで村長が叫ぶ声で目が覚めた。俺はどうやらいつの間にか眠ってしまっていたようだった。何かあったのかと起き上がった瞬間勢いよく倉庫の扉が開いた。驚いてそちらに目を向けると、そこに立っていたのは齡4〜5歳ほどの女の子だった。

「どうしてそんなところに居るの？」

まっすぐな瞳で見つめながら少女はそう口を開い

た。

「俺は人前に出ちゃいけないんだよ」

「どうしていけないの？」

少女は次々と質問を繰り返す。なんだこいつは。

勇者だかなんだか知らないが偉そうな口を利きやがって、文句でも言い返してやろうと顔を上げる。

「それはっ……」

「ふふっ、やっと顔上げてくれた。ねえ……これあげる！」

いきなり差し出されたのは丁寧な装飾が施されているロザリオだった。俺は彼女の手の中でキラキラと輝くそのロザリオから目が離せなくなった。

「なんだよこれっ……いらないうって」

「そんなこと言わないで、気に入ったんでしょ？」

もらって」

「俺がもらっても……」

「うーん、貴方とってもきれいな瞳の色してるでしょ？ だからそれを見せてくれたお返し！」

幼かった俺は、そう言って笑いかけてくれた少女の姿を今までずっと忘れることができなかった。

◇ ◇ ◇ ◇

「時間だ」

その声に呼ばれて、部屋をあとにする。コンコン。勇者の部屋をノックするが返事はない。帰ろうとしようとするも、一緒にやってきた元老院のやつらはそれを許してはくれないようで、

「気持ちよくすればするほど……送れる魔力は多くなるからな。ははっ、お前だって初めてではない

だろう。頼んだぞ。ロイ……」

と下世話な笑みを浮かべて俺を見つめていた。何を言っているんだこのジジイたちはと、正直心底嫌気が差した。

「興味本位なら申し訳ないが気が散るから、部屋からは離れていてほしい」

せめてもの抵抗として、元老院の奴らを下がらせる。

そして意を決して部屋に入ると勇者はベッドの上に座っていた。窓から差し込む光に照らされた彼女はあまりに美しく息を呑んでしまう。

「勇者、本当にいいのか？」

「うるさい……仕方ないでしょう。初めての相手すら国に決められるなんて思っても見なかったけど」

勇者の瞳は俺を超えてどこか遠くを見つめていて、  
なにかを諦めているように見えた。

「まあ……知らないおじさんよりはましだと思う  
わ」

その一言でわずかにでも抱いていた俺の希望は打ち  
砕かれる。もしかしたら、あいつも俺に好意があ  
るんじゃないか。体を重ねているうちに少しくらい  
はいい雰囲気になったりするんじゃないか。そんな  
事を考えていた俺と違って、彼女はただ使命感でそ  
こにいたことがひしひしと伝わってきた。

「わかった」

短く返事をしてベッドに手をかける。

「早くして。魔王討伐軍隊長さん」

そう冷たく言い放たれた瞬間、俺の中で何かが弾

けた。ああ、そうか、もう俺たちはもう普通には戻  
れない。お互い愛し合うなんて無理だと俺の直感が  
そう告げた。それなら俺がすべて我慢すればいい。

「ははっ……じゃあお望み通り、こっち向けよ」

……無理やり顎を持ち上げ、唇を重ねる。もう戻  
れない。そこからはただ無心だった。彼女の服を剥  
ぎ取るように脱がせ、首筋、胸元……それから腹を  
通って、大事な部分まで全てに舌を這わせる。その  
間彼女は下唇を噛んで我慢していた。時折抵抗しよ  
うとするも、耳元で

「そうやって嫌がって言いわけ？ 魔力が使えな

いお前が悪いんだろっ……もっと感じてみる」

と囁くと彼女は一瞬悔しそうな顔をしたあと、諦  
めたように俺にされるがまま感じていた。

「はあはあっ……このまま挿入するからなっ……」

「待って、顔見られたくないから後ろ向きにしてっ」

そう言われ、後ろから自らのものを彼女の中に挿入したとき、満足感とやるせなさ2つの気持ちが俺の中で渦巻いた。

「はあはあっ……ほら声出せよ。お前が感じたほうが魔力が送れるらしいから、我慢すんな」

頭では何をしているんだと思いつつ、腰の動きは止まらない。そして……

「うっ……全部出すからなっ……受け止めろ！」

俺たちは目を合わせることもなく、行為を終了した。

「最後まで俺のこと見ないんだな」

「早く出て行って……」

そのまま布団を頭までかぶった彼女は、もう顔を見せることはなかった。諦めるように一瞥し、部屋をあとにする。

◇ ◇ ◇ ◇

「ははっ……これじゃ、嫌われてしかないか」

廊下に出た瞬間乾いた笑いが口から溢れる。首からロザリオを取り出して、床に投げつけようとするも、あと一步のところまで出来なかった。月明かりに照らして見上げるとあの時と変わらずロザリオはキラキラと輝いていた。

◇ ◇ ◇ ◇

その後聞いた話では、無事彼女は聖剣を使えるようになった。王はたいそう満足したらしい。

「ロイ、早く準備をしろ」



きっと叶うことのない思いを胸に俺は今日もノックする。

「勇者……時間だ」

今日も魔力供給の時間が始まる。

おわり